〈記念論文〉

混沌とした不安な社会の中にいる
若者たちへのメッセージ

中　神　洋　子

はじめに

この『同朋福祉』に、同朋大学奉職最後の年に寄稿させて頂く機会を与えていただいたことに、まず心から感謝したい。しかも学術論文集でありながら、私的な経験も含めた「エッセイ仕様のノート」という体裁で書かせて頂くことに対しても、関係者の皆様にお礼を申し上げたいと思う。

私は、本学赴任以前に、国際連合のひとつ、国際連合児童基金（以下通称のユニセフ）で、国際専門官として勤務した経験がある。南米のガイアナを含むカリブ海諸国（ジャマイカ、バルバドス、ドミニカ国、グレナダ、トリニダード・トバゴなど）や、南アジアのバングラデシュなどの、いわゆる開発途上国と、ニューヨーク本部での貴重な経験や実践は、本学での主要担当科目、『国際社会福祉論』や『（国際）ボランティア論』等に生かさせていただいた。この稿は、これからの日本を支える若い方たちへの最後のメッセージを念頭に、様々な私的な経験やその都度考えた主なことを、上記の担当科目の柱にしたものも含め、まとめたものである。

私が学生であった頃（1960～1970年）は、政治・経済・社会情勢などが、2018年現在とは全く異なるので、様々な価値観や考え方に違いが生まれることは当然のことであろう。私の時代、すなわち団塊の世代には、社会

の動き、技術や経済発展の速度は異常に早く、そうした歴史的スピードがますます進んでいくものという期待感が大きかった。従って、社会が更に良くなるための変革を求めるなどの一種の高揚感が、特に若者たちにはみなぎっていた。社会の在り方に反発を持ち、時には権力の大きさに対する絶望感も抱きながら、心のどこかで、「何かを期待する気持ち」、より良い社会への「希望」も強かったような気がする。しかし今の学生たち若者には、将来への希望や目的は、人にもよるだろうが、希薄にみえる。閉塞感あふれる現在の政治・社会・経済状況下で、多発する理不尽極まりない問題に囲まれていれば、「明るい未来」を想像し難いのは頷ける。しかし、それでもなお、押しつけにならない程度に、今伝えたい幾つかの思いを書き綴ってみることにした。若い方たちの今後の人生にとって、何らかのヒントになれば幸いである。

1．必死に生きる！　～「命」の安い国で

まずバングラデシュの子どもの話から始めよう。南アジアにあるガンジス川のデルタ地帯に発達したこの国に私がユニセフ専門官として勤務したのは、1988～1992年頃である。大洪水や巨大モンスーンなどに襲われ、20万人近くの人が亡くなるという自然災害にも遭遇した。道路は寸断され、遺体の収容や埋葬もままならず、最悪の衛生環境の中でコレラや赤痢などが蔓延し、精神的にも厳しい現実を味わった。当時は経済状況も悪く、その指標の一つである5歳未満の子どもの死亡率も非常に高くて、最貧国のリストに名を連ねていた。

子どもは3歳位になると、家族の中でも貴重な労働力であり、自分のおなかを満たすためにも、或いは家族の家計を支えるためにも、彼らは早朝から様々な場所で働いていた。大切な仕事場のひとつが、市場であった。そこでは、兄弟姉妹や友人たちと数人のグループで、お客の車の見張り、窓ふき、

荷物持ちなどを分担してせわしく動き回っていた。ある日、8歳前後のリーダー格の男の子が、「マダム、今日はこの子を使って」と私の荷物持ちに指名したのは、3歳位の市場デビュー間もない小さな女の子であった。ジャガイモ、玉葱、コメ、バナナなど重量のある野菜や果物の入った袋を、指先が紫色に変色しつつも、地面につかないように力一杯持ち上げ汗だくになって運ぶ姿に、胸がつぶれそうになった。私がいくら手を差し伸べても拒絶し続けた彼女からは、「自分の仕事だからやり遂げる」気迫がひしひしと伝わってきて、胸を打たれた。自分の命は自分で何とか支えるといった気概やプライドが、この幼い子には既に備わっているということにも驚いたが、同時に子ども時代も選択肢も無い現実に、切なさを感じたものだ。

ジャマイカでも、一家の大黒柱として働いていた大勢の子どもたちに出会った。この国をはじめ、カリブ海諸国では、奴隷制の名残なのか、通い婚の風習があり、女性が家族の大黒柱となることが多い。1980年当時は、女性が家長の家庭は30～45％といわれていた。男性はというと、複数の家庭で子どもを作って、経済的な側面は女性任せといった具合で、責任放棄していることがほとんどであった。女性の経済活動や職種は限られていたし、収入も平均で男性の半分～三分の一程度であったため、そうした女系家族が貧困層の大部分を占めていた。従って、子どもたちは、貴重な労働力として家族の経済を支えざるを得なかったのである。彼らは野菜や果物、花、水などを売り、車の窓を拭き、まともな食事や休憩をすることもなく、一日中働いていた。おなかをすかした子どもたちは、夜になると建物の隙間や橋の下などで、シンナーや“がんじゃ”と呼ばれていたマリファナを吸い、一時的にも空腹感を忘れていたのである。コロンビアやペルーで出会った子どもたちも、靴磨きや大人たちの使い走りをしながら、懸命に生きていた。

こうして一日一日を「生きる」「生き延びる」ことに必死な子どもたちに対して、どのような支援ができるのかを考え実践する仕事ではあったが、開発途上国での命、特に子どもの命が実に安く軽いことも同時に実感したので

ある。例えば、ジャマイカのスラムでのことだ。当時の政権に対抗していた反政府勢力下にあったそのスラムの視察は、政府と協力して働くことを前提とした国連職員の私にとっては、危険極まりないことであった。敵意に満ちた視線を送るスラム街の住人の中で私が目撃したのは、泣き叫ぶ2～3歳の女の子をレイプする男たちであり、その様子を取り囲むようにして平然と見ている住人であったのである。あまりのショックと怒りで呆然とする私は、「性病を治すためには、幼女との性行為がベスト」と皆が信じていること、子どもたち自身も、誰もが経験する「当たり前」の通過儀礼のように思っているという更なる衝撃的な説明を聞かされ、この国の子どもたちの地獄を見た思いであった。

大人の都合で、大人のために子どもの命を利用するといった行為は、何も目新しいことではない。例えばナイジェリアの「赤ちゃん製造工場」のように子どもを「もの」として売り買いし、様々な目的に使用する例は、インド、中国、タイなどのアジアの国々でも見られる。過酷な労働や性奴隷のため、使い捨ての兵士にするため、挙句の果ては、殺して臓器移植や宗教的儀式などで内蔵を使用するといった残酷極まりない事例は、数多く報告されている。

国連の依頼を受けて、元モザンビーク教育大臣のグラサ・マシェルは、3年間の調査後『武力紛争が子どもたちに及ぼす影響（通称マシェルレポート）』（1996年）を提出した。それによると、世界の約40か国、主に紛争国や地域に約30万人以上の子ども兵士が存在するという。彼らの過酷な状況などは、筆者の『「子ども兵」をめぐる諸問題を通しての一考察(2008)』に詳しく述べているが、その存在が国際社会の注目を浴びたのは、1980～1988年のイラン・イラク戦争の時であった。イランの当時最高指導者であったホメイニ氏率いる最新鋭部隊の革命防衛隊が、子どもたちに地雷原を走らせて後続の成人兵士の安全を確認するといった、命を使い捨てにする非情な戦術をとったニュースは、世界中を震撼させた。戦争そのも

のが、人間的な正常感覚を麻痺させるに充分であろう。人命を軽視し、時には盾にし、特攻兵器として使い捨てる様々な残虐行為は、日本の太平洋戦争でもあったし、20世紀末頃から台頭してきたアルカイダやイスラム国（IS）、ボコハラムなどの民間の過激組織による、いわゆる「テロ」活動にも引き継がれている。

実はある国での支援活動中、私は内部の組織的汚職のからくりに気が付いたことがある。多額の年間資金がどこかに消えてしまうことも含め上司に報告したところ、彼も以前から認識していたようだ。しかし、任務や日常生活を滞りなく全うするためにも、黙認するようにと指示された。納得がいかなかった私は、そのことをこの国での支援経験の長い友人に相談すると、「命の値段はここではとても安い。日本円にすると200円位なものだが、彼らにとっては大金だから、誰でも喜んで（殺人を）引き受ける」、だから「言動には注意し、出されるお茶にも気を付けて」などの忠告を受けた。以来随分落ち込んだが、自分の命は自分で守ることが肝心なこと、自己流の正義感はできるだけ抑え、慎重に「賢く」振る舞うことを次第に会得していった私であった。今でも、それが良かったのか、或いは「大人の狡さ」だったのか正直わからない。が、それでも例えばバングラデシュでは、3度ほど命の危険にさらされた。

1989～1990年といえば、世界中が、ベルリンの壁崩壊やソビエト連邦の解体、イラン・イラク戦争など、激動の時代ではあったし、国内でも、当時のエルシャド軍事政権転覆（1990）を狙って、毎日のように市民による暴動が続いていたから、ありえない話ではなかったが。命の終わりを覚悟した瞬間は、平穏な日本の生活環境にいる今考えるとぞっとするが、その時は、言葉にするのが難しいような不思議な感覚に包まれていた。人は、例えば自然災害の場合にでも、自分は大丈夫、自分には危険は及ばないなど、心のどこかで考えがちだ。根拠のない過信というものである。日々平和な状況に慣れた日本人の危機意識が希薄になっても、おかしくはないかもしれない。し

かし命を失うことは、時や場所などを選ばず誰にでも起こるのだという一種の悟りも似たものであった気がしている。

こうした経験の数々はもちろんのこと、生きることに貪欲で必死に日々を過ごす開発途上国の人々からの強烈な影響が、「命」は、生きている限り大切にしなければならないという強い信念を私の中に培っていったのは確かだと思う。

2．「死ぬ権利」～　経済的に恵まれた国の特権

一方、日本に帰国するたびに驚かされたのは、生きることに疲れて死を選ぶ人の多さだった。日本での自殺者の数は、2003年にピークの34,427人（警察庁『自殺統計』）から、特に2009年以降徐々に減少傾向にある。それでも2017年は、21,140人であった。これを多いと見るか少ないと考えるかは人にもよるが、15～24才の若者の自殺率が1990年代以降増加しており、今や世界の中でも最悪の状態であると聞くと、心穏やかではない。若者にとって、今の日本は将来への展望が描けず、過酷な重労働環境が広がる中で、生活の十分な保障も目的も持てない、生きにくい社会なのかもしれない。しかし、自分の命を自分のものとだけ考え粗末に扱う傾向には賛成はできない。今の自分が存在するのは、何億年にもわたって様々な他の命のつながりと支えのおかげであることを、決して軽んじてはならないと思うからである。

命の終わらせ方や方法を自己決定する、いわゆる「死ぬ権利」が日本において表舞台に出てきたのは、1962年の嘱託殺人事件がきっかけと言われる。ヨーロッパでは、1936年頃から「安楽死」や「尊厳死」をめぐる議論はあったし、スイスなどでは、医師による薬の処方を受けた患者が、最終的に命の終え方を自己決定するPASが、1942年には認められていた。オランダ、ベルギーやアメリカのオレゴン州などでは、積極的に患者の望む死を医

師が手助けする「安楽死」などは、早々と合法化されている。確かに人間は最後まで自分らしく生きたいという思いがあり、いつ死ぬか、どのように死を迎えるかなどは自己決定する権利があるという考え方に対しては、宗教的、社会的、或いは道義的に様々な議論はあるだろう。歴史的に見ても、古代ギリシャやローマでも安楽死を認めていた事実はある。個人の希望や権利が人命尊重の大原則より優先される社会背景があることも承知の上である。ただ、こうした議論は、先進国と言われる、経済的に豊かな国々、もしくは貧しい国においても、一握りの裕福な層においてのみ見られるものだ。高度な医療技術、医療制度や医療サービスなどの体制が十分に発達し、病気になれば充実した医療・保健やアフターサービスなどを享受できる国での権利だといえる。豊かな国の仲間でもある日本では、「当たり前」の権利と考えがちである。しかし前述したような、生きることに必死、生き延びることが困難な環境にいる者たち、明日までの命を保証されない国々の人たちにとっては、全く無縁ともいえる、最高に贅沢な権利であることを私たちは忘れてはならない。

3．命の序列化　～「価値」のある命、邪魔な命

とは言っても、他人の命であれ自分の命であれ、命を粗末にするという行為は、人間社会にはつきものだ。私たちは、「命は大事なもの」と言いながら、無意識のうちに、役に立つ価値のある命、無用な命といった選別をし、序列化する傾向がある。挙句の果ては、役立たずの命は軽んじられ安易に切り捨てられる。こうしたことは、歴史的にも国や地域を問わず頻繁に起こっていることだ。ナチス・ドイツでのユダヤ人虐殺、旧ユーゴスラビアでの民族浄化による民族間での殺戮、ルーマニアのチャウチェスク政権崩壊後に明らかになる孤児たちの悲惨な状況、現在も増え続ける多くの難民など、多くは戦争や内戦といった極限の非常事態の中で起こったことであり、今も起

こっていることである。もちろん日本も例外ではない。国家の誤った情報や認識がもとになり翻弄された元ハンセン病患者たち、日常生活の中における高齢者や障がい者に対する命の軽視や邪魔者意識もあれば、貧しさゆえの間引きや姥捨ての風習も、さほど遠い時代の話ではない。

こうして人間という同一の種の中でも、命の序列化・選別はあらゆる場面で日常的に存在してきた。それは、人間は自然界のほんの一部に過ぎないという明らかな事実を、普段の生活の中でしっかりと認識していないことによって起こりうる、「人間の傲慢さ」のなせる当然の現象なのかもしれない。万物の頂点に立ち、自然界のすべてを神の代理として支配・管理していくのが人間であることを謳ったキリスト教旧約聖書の『創世記』に、20世紀後半から顕著になってきた地球環境の異変の根源があるという見方もある。しかし、万物に神がやどり、どの命も等しく尊いと考える東洋社会においてでさえも、例えば、人間にとって害になると判断すれば、たとえ人間の側に非があったとしても、一羽一絡げで殺処分したりして排除することに何の疑問も後ろめたさも感じないし、非を改める努力もしない。こうした、人間が中心にいて、自然界の生物も無生物もすべては人間にとっての資源であり、コントロールできるという「人間中心主義」の考え方は、疑う余地もなく我々の間に浸透している。

20世紀後半頃から、自然保護や自然との共生、「持続可能な開発」などが重要な課題として叫ばれるようになり、「環境中心主義」を対立軸として唱える専門家も現れる。しかしそれは、あくまでも「保全」の立場での環境保護姿勢である。いつかは何らかの形で人間に恩恵を与える可能性を秘めた自然を守るといった「人間ファースト」の考えが基本にある。それは各生命体の視点に立ち、人間とは無関係にそれら独自の価値を認め「保存」をするという考え方では無い。確かに生物多様性の重要性は、国際社会でも強調されるようになってきたが、やはり「人間中心主義」の範疇から抜け出すことは無いし、あえて議論を避けているきらいがあるのが残念である。

日本における動物行動学の草分けとして名高い日高敏隆（1930－2009）は、「自然環境に打撃を与えたのは人間の文化だけ」と述べ、人間文化の暴走に警告を鳴らしている。人間は自然界に依存して生きているが、自然にとっては、人間がいない方がむしろ助かるのだろうが、人間は日常生活の中で、そうしたことへの意識はそれほどしていないし、教育現場ですら深く議論することもなかった。オーストラリアの哲学者のジョン・パスモアが、『自然に対する人間の責任』（1979）の中で言っているように、そのことが、人間自身の身勝手な行動や考え方を自覚し、自省する機会を持てない原因の一つになっているのではないだろうか。人間も動物であるのに、あえて人間と動物に分けてきた長い歴史は、すなわち人間が、自分たち以外の種に対して行ってきた傲慢で残虐な仕打ちに無自覚な時間ともいえる。他の命に対する尊敬や感謝の念、思いやり、謙虚さ等の欠如は、人間という同種の中における命の序列化にも繋がっている。

実は毎年『ボランティア論』を受講する本学の学生に、私が実際経験したことのある紛争地でのエピソードをもとに作成した、トリアージに関する質問に答えてもらう課題がある。受講生は社会福祉を学ぶ学生がほとんどだが、毎年6～7割の学生が、トリアージの原則に従わず、助かる可能性の高い高齢者を切り捨て、助かる可能性の無い子どもを選ぶ傾向がある。もちろん、過酷な現場の経験がないので臨場感は薄いだろうし、映像や説明から想像するしかない学生たちである。従って彼らの答えがすべて本音であるとは言えないが、選択した理由の記述に気になるものが多い。例えば「高齢者は、あと数年で死ぬのだから、助かる確率の低い子どもに治療を譲るべき」「子どもの方が、社会に貢献する確率が高いから」等といったものを目にすると、心が痛い。本学が大切にしている「共にいきる」といった考え方にも反するのではないかと心配になる。

自らの中に存在する「傲慢さ」を認識し、自分の言動や考え方を時々は顧みるか否か、世の中のいかなる命にも平等に向き合い尊重する気持ちを持つ

か持たないかは、おそらく、後述する「人権意識」の有無にも大きく影響するのではないかと考える。

4．「平和」な時代の終焉が迫っている？

さて、自然界の命という地球規模の話に膨らんだところで、今日本にいる私たちが生を謳歌し、日々の営みを可能にしている社会環境について触れてみたい。今こうして安心して快適に過ごしている私たちであるが、世界の三分の一の国や地域では紛争が絶えずおこり、無差別に命を狙うテロが時間や場所を選ばず起こっていることを、対岸の火事のように考えている人は少なくない。情報技術の進歩で一瞬にして世界中のニュースに触れられる環境にいるにもかかわらず、自分を取り巻く社会の情勢には無関心である。「平和ボケだから」といった言い訳や自分自身を揶揄はしても、知ろうとする意志が希薄でそのための努力はしないから、社会全体の現状や問題に関しても無知であることが多い。特に若い人たちにその傾向が強いようだ。人間にとっての最低限の安心・安全が皆無の状況下に置かれ、命の危険に日夜さらされ不安に怯えている人、難民として異国で不自由な生活を強いられている人、或いは、不法移民として仮の居場所も無く放浪している人などが数えきれないほど存在することすら意に介さない。自国の中で似たようなことが起こっていても、他人事のようにとらえがちだ。或いは、ほんの瞬間心にかけることがあっても、すぐに忘れてしまう。

『国際社会福祉論』の講義では、「平和」について考える時間を設けている。国際的には長いこと、戦争の無い状態といった「消極的平和」を「平和」と定義してきた。しかしお互いの軍事攻撃などが終わったとしても、世の中にある様々な不平等、差別や偏見、貧困などが蔓延していれば、人々が「平和」を享受しているとは言い難い。ということで、そうした社会の様々な困難な問題や課題に取り組む「積極的平和」というとらえ方が国際的にも

共有されるようになってきた。授業では、特に後者を念頭に社会開発の在り方などを重点的に議論した。更に、ユニセフの親善大使である黒柳徹子氏から頂いた貴重なビデオなども大いに利用した。少しでも戦禍の悲惨な状況、飢餓の実態、虐殺の現場の残酷さなどを、学生達の視覚に訴えたかったからだ。以前は、「吐き気がした」と言いつつも、しっかりと映像を直視し、その後に提出するコメントにも、彼らなりに深く考えたことが反映されていたものだ。しかしここ数年の傾向だが、そうした映像が始まると部屋を出ていく学生や画像を意図的に全く見ない者が増えた。これが何を意味するのかは議論の余地があろうが、私には、臭いものにはふたをして、現実、特に悲惨な状況を直視しない傾向の現れに見える。平和に慣れ戦後が遠くなるにつれて、戦争や貧困などの話題は、暗くて「重い話」として敬遠し忌み嫌う傾向が強くなっている現在の日本である。今年の夏、原爆の生き証人が講演を頼まれた際に、「政治的なことには触れないでほしい」と主催者に言われて唖然としたという話があった。

現実直視を避ける、刹那的に生き、深く思考することを放棄してしまう、どんなに理不尽で腹立たしいことがあっても、批判することをあきらめる、そして理不尽なことに対して「怒る」ことをやめる、長いものに巻かれることを良しとするなどの考え方が、急速に日本に広がりつつある。こうした一般市民の傾向は、実は体制を維持する側にとって、これ程都合の良いものはない。体制を維持しコントロールする国家権力は、国民の平和や人権を第一義に考えていると口にするが、これはあくまでも建前だ。古今東西、その様な良心的かつ誠実な国家など存在したためしはない。

日本でも、特に有事の際には、国益が人命より優先されてきた。最近の出来事の中で一番わかりやすい例が、東日本大震災の際の福島原発事故への対処だ。もともと原子力は、兵器としての負の利用にしろ、エネルギー源確保のプラスの利用にしろ、国家防衛や経済発展の鍵とみなされている。そのため、国家の第一級秘密であり国民の命を犠牲にしても守るべきものとし

て、日本でも君臨してきた。従って、国民には必要かつ正確な情報も、国家にとって不都合となれば覆い隠され伝わらないのが常である。社会主義国であったソ連時代のチェルノブイリ原発事故（1986年）の際と同じように、この民主主義国家といわれる日本で行なわれている様々な隠蔽工作や嘘の情報に、私たちも多かれ少なかれ気づいているであろう。

第二次世界大戦争の敗戦国となって以来、見事な経済発展を実現した日本は、今年の夏73年目の戦後を迎えた。戦争体験者がほとんどいなくなり、或いは超高齢化し、国民の戦争に対する関心も薄れているという。8月6日、9日、そして15日が何の日かも知らない、いわゆる「戦争を知らない世代」は、為政者たちも含め、その狂気に満ちた残酷で悲惨な状況すらイメージできなくなっている。「戦争はしたくなかったけど、気が付いたら知らない間に戦争が始まって巻き込まれていた」「"敵"が殺されると、大喜びして万歳をしたものだ」などという80～90才代に達した残り少ない戦争体験者の声に、真摯に耳を傾けるべき人たちが激減している。今こそ、特に若い人たちには、自分たちのこれからの社会がどこに向かっていくのかを、人任せにしないで考えて、何らかの意思表示や行動をしてほしいと願うばかりだ。

さて、再び個人的な話をしよう。1945年、私の母は長崎で被爆した。当時の政府は、「原爆」という言葉の使用禁止のかん口令を敷き報道を規制した。ほとんどの人々は、原子爆弾のもつ放射能の恐ろしさに関しても、何の知識も持っていなかった。その様な一般市民の一人として、母は、また大きな爆弾が落ちたらしい位の感覚で、すぐに被災地での医療活動に向かったという。その時の実に悲惨な生々しい話は、私が物心ついた頃から何度も繰り返し聞かされたものだ。頭がパクリと割れ脳の中身や目玉が飛び出した少年、体中の皮膚が、血や洋服の繊維とも見分けがつかないで真っ赤にとろけ出して、水を求めて手を伸ばし息絶えた女性、川やため池、用水路など水のあるあらゆる場にあふれかえる、人間の形もとどめないほどの人たち、黒焦げになって転がっている人の話、ショックで何から手を付けて良いのか途方

にくれた辛さなど、幼かった私には、生涯忘れることができないほどの強烈なインパクトを与えたのは言うまでもない。

今なら「子どもにそのような残酷な話をする酷い母親」と非難されることなのだろうが、私には、戦争の残酷さ・むごさが骨の髄まで染み渡る結果となった。放射能にさらされた母は、その後様々な放射能の後遺症に苦しむことになり、私を生むことすら命がけであったことは、後になって知ることとなる。ただ、その母は、自分が「生き証人」として表に立つこと、或いは原爆手帳を持っていることを他人に知られることを最後まで嫌がった。よく言われる「ピカ（原爆のこと）は人にうつる」などの謂れのないいじめや差別を受けたとは考えにくいが、結局彼女の真意を最後まで聞き出すことはできなかった。が、余程のトラウマを抱えていたのであろうと推測できる。しかし、私は、戦争はどんなことがあっても許さないという強い意志で、その非情さを伝え続けていく責任を任されたと解釈している。

一方現実は、非常に危うい。国際社会全体が狂い始めている、国際秩序が大きく変わっていくようにしか見えない昨今である。特に自国最優先・保護主義を前面に押し出し、国際的な協力を拒み始めた米中などの大国、右傾化し不寛容の度合いを高めている西欧諸国の動きは、不安要素だ。日本の場合も、『特定機密保護法』（2013）、『集団的自衛権』容認の閣議決定（2014）、『安保関連法』（2015）、『共謀罪法』（2016）などが、国民が納得するような深い議論も説明も無く強行可決されていくのを見ていると、1980年代以降に始まった「敗戦前の世界への回帰」が、着々と準備されているどころか、加速しているようで不安になるし恐ろしい。現に改憲をもくろむ以前に、自衛隊が「駆けつけ警護」という美名のもとに、戦時体制にあった南スーダンに派遣されたことは、記憶に新しいだろう。隊員たちが、命の危険にさらされるほど激戦状態であったことをひた隠しにした出来事も、おそらく覚えているはずだ（日報の隠蔽など）。

日本は、世界で唯一の被爆国でありながら、いまだに『核兵器禁止条

約』（2017年7月7日採択）に、署名すらもしていない。核の廃絶に向けてのリーダーシップをとると豪語しながら、具体的な動きは何ひとつしていない。オバマ前米大統領が「核兵器の無い世界の平和」実現を表明した際も、世界的核軍縮につながるような「核の先制不使用」を宣言した時も、日本は反対したのである。被爆者たちや2017年にノーベル平和賞を受けた国際NGOネットワークの「核兵器廃絶国際キャンペーン」（International Campaign to Abolish Nuclear Weapons以下ICAN）はその度に落胆し、口約束だけの現自民党政権を非難している。推定で1万5,000基ほどある世界中の核の大半を保有する軍事大国アメリカ、その核抑止力の恩恵に甘んじる日本が、国際的に信用を失っても当然であろう。アジア地域全体での連携や話し合いによる外交政策の強化・協力の可能性を切り捨て、この大国の傘下に収まり追従することを最適と考える自国を、実に情けないし愚かであると考えるのは、被爆2世の私だけではないだろう。

教育の世界にいながら無力な自分が情けないのだが、教育分野にも危うい風が吹き始めているようだ。以前から、例えば広島や長崎などの学校現場での「平和教育」に、お上から横やりが入るという事は少なくなかった。今後は、戦前にあったような、思想や言論統制が強化されるようになる可能性は高い。政府の方針や考え方に反対すれば「反日」呼ばわりされ、「危険分子」として行動を規制され、監視されるようになるのではと心配になる。深く物事を考えないような子どもや若者たちの増加、何を言っても行動しても押さえつけられ否定されるのだから無駄なことはしない、不利になるようなことに時間は使わないといった考え方の蔓延が、ますます日本の将来を危うくしている。

確かに、今あらゆる面において、若い人たちの保守化、体制支持は増えている。長きにわたって苦難の道を歩まされ、苦渋と屈辱の歴史を背負わされてきた沖縄でさえも、アメリカの基地などをめぐって、若者層と、高齢者層との分断が顕著になっている。どうせ基地は無くならないのだから、基地を

容認して財政支援を受けた方が得であるという若い層、沖縄だけがなぜ日本全体の負の部分をいつまでも背負わされ、不平等、理不尽な扱いを受け続けるのかと不満をあらわにし、基地そのものに疑問を呈し反対する高齢者層が対立する、悲しくも厳しい現実だ。

メディアの保守化にも歯止めがかからない。ジャーナリストとしての倫理観や使命感をもって声を上げるプロは少なくないであろう。しかし、例えば公共のメディアのトップ人事権を政府が握っていたりすれば、それこそ政府に都合の悪い報道は上層部に握りつぶされるか、当たり障りのないものに成ってしまう可能性は高い。権力者によるメディアや情報のコントロール、デマや異常なほどの恐怖感を流布し、人心の感情操作をするなどは、世界のあらゆる戦争や内戦での効果的な戦略として使われてきた。日本で最近北朝鮮の脅威をことさら強調してあおったのは、良い例かもしれない。その脅威から国を守るには、核や高性能の兵器、軍隊が必要、軍事費の拡大も必須といった政府側の論調を、一般の人々はさほど疑問を呈することなく受け入れてしまうのは残念なことだ。

前述した私の授業で使う「積極的平和」は、ユニセフなどの国際機関で社会開発の指針のようにされてきたものだが、数年前から国のリーダーたちが好んで使用する「積極的平和主義」とは、全く異なることに、どれだけの人が気付いているのだろうか。彼らの使用する「主義」は、「平和」という言葉を隠れ蓑にした、傲慢な考え方が基本にある。どこそこの国は、核を開発し「悪の権化のような独裁者的な為政者」は国民の自由を奪い苦しめている。だから「正義の味方の我々が」積極的に軍事介入して成敗してあげようなどという大義を振りかざす主義であることに、何かおかしい、と一瞬でも良いので疑問を持つ人が増えてほしいと考える。軍事的な攻撃などに手を貸すことで、大勢の無関係の人々、子どもや女性が無残に死んでいくことを、人ごとではなく、同じ人間としてとらえてほしいのだ。世界の現状を見ていると、権力者たちにとっては、一般市民の命はしょせん「安くて価値のない

命」なのかもしれないのだろうが。

今は、砲火に見舞われることの無い「平和」な状態にいる私たちだ。しかし世界の秩序が大きく変わるといわれるこの先、国家の権力の名のもとに、基本的人権、言論の自由、特に政権の方針に批判し行動する自由などが奪われ、管理され踊らされ、人権をはく奪される状況が来る可能性は否定できない。それだけは、何としても食い止めなくてはならない。特に、将来を担う若者たちにとっての正念場になるだろうと思う。

5．日本の女性たちは、未だに「セカンド市民」？

さてこの原稿を書いている時に、某医科大学が、点数や合格基準の操作などで、何年にもわたり組織的に故意に女性の医学部受験生を差別し振り落としていたというとんでもないニュースが飛び込んできた。なんでも女性は結婚して出産するので、将来の医療現場で差し障りがあるからという理由らしい。おそらくこれは、氷山の一角であろう。人口の半分以上を占める女性への差別が旧態然として存在することの、ほんの一例に過ぎない。政治を司る国のリーダーたる人たちだけでなく、財界でも、一般の企業でも、スポーツの世界でも、或いは大学などの教育現場でも女性へのハラスメントや暴力、不平等で理不尽な扱い、女性蔑視や軽視の類は、日常化しているといっても過言ではない。目玉政策として「女性が輝く社会」実現を掲げる現政権の総理の言葉は、実が無くただむなしく響くだけだ。8割以上の女性たちにとっては、見せかけのフェミニズム、単なる労働力不足解消の駒にしか映っていないという報告もあるのに、気づいていないのであろうか。しょせん男性目線での政策には限界があるという証なのであろう。

様々な差別が世の中に存在する中、女性への差別は、フランスの小説家ブノワット・グルーの言葉を借りれば、「最後の植民地」（1975）と言われるほど、その問題解決への道は困難を極める。特に日本における女性に対す

る差別は、女性解放運動が高揚した1970年代から確かに改善された側面もあるが、本質的には変わっていないと感じることが多い。1970年代といえば、1960年代にアメリカを皮切りに西欧諸国で始まった女性解放運動が、日本でも広がった時期である。その頃は、女性が男性と対等に社会でのキャリアを積むという事は珍しく、職種も限られていた。同一労働同一賃金の仕事をと希望すれば、公務員や教職が一般的だったため、私も県や市の教職試験に挑んだ。現実には、女性は男性の補助であり責任ある担任を持たせない、進路指導を必要とする3年生は担当させないなどの規制があった。早朝出勤し、男性教員を含む先輩たちの机回りを掃除する、お茶を入れるなどの役割もこなすよう無言の圧力があった。一人前として認められるためには、男性の200倍300倍の努力が必要という先輩女性教師からのアドバイスが、当たり前のように受け継がれていたのである。

日本では、例えば未だに「女人禁制」を堅持している場所などは少なくない。「女性は穢れている」「伝統だから」などの理由はあろうが、女性差別が基本にあるのは間違いない。今年2018年、大相撲春巡業で、倒れた舞鶴市長の人命救助のために土俵に入った女性看護師に対して、即刻出るよう指示があった事件は記憶に新しい。世界経済フォーラムが2006年から行っている男女平等度合を示す『ジェンダー・ギャップ指数』（2017年）によると、日本は対象国144か国中114位という不名誉な結果をもらっている。女性を長いこと蔑視してきた日本社会での女性の地位がいまだに低いのは驚くに値しないが、『女性差別撤廃条約』（1979年）制定から40年近くたっても、女性はセカンド市民として軽んじられ、侮蔑される対象であり続けているようで、非常に悔しいし悲しい。前述した政府の掲げる「女性が輝き活躍する社会」が、単なる掛け声に過ぎないことが露呈した感もある。

「女性」に対する理不尽な扱いは、実は、国連勤務時代にももちろん存在した。国連の『女性差別撤廃委員会（CEDAW）』が1990年初頭にニューヨーク国連本部に在籍する専門官を対象に行ったある内部調査では、会議な

どでの女性の発言時間は、圧倒的に少ないこと、もし女性が長く発言すると「おしゃべり」と不快に思うが、同じ時間を男性が費やした場合は、「雄弁」であるとプラスに評価するといった、心理的な感じ方の差が存在することを批判的に指摘している。女性の地位が低いイスラム国バングラデシュでも、セクションチーフとして赴任した当初は、まるで針の筵にいるような居心地の悪さと、決して好意的では無い視線にさらされたものだ。

思えば、女性が「もの」ではなく、人格を持った人間」として国際的に認められたのは、1993年のことである。それほど昔の話ではない。女性の権利獲得のために命を懸け、世界的先駆者として名高いオランプ・ドゥ・グージュ（本名はマリー・グージュ、1748－1793）が断頭台の露と消えてからちょうど200年目のことだ。世界の様々な国で、本当の意味での女性の人権が守られる戦いは続き、少しずつ進展をみせているようにも見える。が、女性に対する暴力は後を絶たない。パワーハラスメント（以下パワハラ）、セクシュアルハラスメント（以下セクハラ）の類は、あらゆる場面で起こっている。女性解放運動発祥の地、アメリカですら、セクハラを許さないという「＃Me, too」の動きが今年になって活発になってきた位である。国連総会で2015年に採択された『持続可能な開発目標（SDGｓ）』の一つに、「2030年までにジェンダー平等の達成」（目標５）があるが、その達成が果たして可能かは、政府や国際機関などの公共機関だけにかかっているのではない。NGOなどの民間グループ、企業、メディア、スポーツ界、教育界などのあらゆる組織、そして私たち一般市民も連携し協働する、更なる努力が必要であると考える。

実は1970年代、女性たちのリブ運動が盛んなイギリスでの忘れられないエピソードがある。リブ運動に携わっていた女性（学生）たちにある日呼び出された私は、突然叱られたのである。個人チューターの教授が、“頑張りなさい”という意味で肩をポンとたたいたことに対して、私が笑って対応したからだというのだ。確かに、日本人特有ともいわれる「笑ってごまかす」

ことは、まだ当時英語が堪能ではなかった私にもあったと思う。でもそれが好ましくないと考える彼女たちの心の内を知りたくて、理由を聞いた。すると、教授の態度は、condescending（見下すような、憐れむような態度）でありpaternalism（家父長主義）の典型であり、そのような男性の態度に不必要にへつらうことは、女性の自立への弊害になるといった説明であった。笑いの解釈の違いや誤解があったものの、女性も人間なのだから、自尊心を失うな、女性自身がそれを自覚し、人間として精神的にもっと強くなれという彼女たちからのメッセージは、十分に伝わった。

こうしたことに関連したもう一つのエピソードを紹介しよう。バングラデシュでの話だ。1988年、私は、2006年にノーベル平和賞を受賞したモハマド・ユヌス氏と出会った。彼が、貧しい人々、特に農村の女性たちに無担保での小口融資、いわゆるマイクロクレジットを行うグラミンバンクを設立して数年たった頃だ。彼の行為は当時あまりにも非常識で無謀であると批判されたが、周囲の心配をよそに、毎月の返済額回収率は98％にも達していた。マイクロ融資を受けた女性たちは、ユニセフの支援で様々な小規模ビジネスを始めた。例えば鶏の飼育と鶏卵の販売、かごなどの製品の製造・販売などである。利益はもちろん少なかったが、徐々に家庭内での夫や義父たち男性の信頼を得ていくことになる。イスラム教徒の国においての女性の地位は、家畜よりも低いといわれる中にあって、女性たちの自尊心は皆無に近い。しかし、ほんのわずかでも、自力で経済的利益を生み出す過程で、彼女たちは自信を培っていったのである。ユヌスさんや私たちに向かって、「あなたたちが私たちを人間と認め、強くしてくれた」と発したことばが、今でも耳に強く残っている。女性が自分にも価値があると認め始めると、すなわちエンパワーされると、実は、社会開発の支援はとてもしやすくなるし、その成果も急激に増す。女性は子どもとの関りも密接であることが多いので、それは、子どもの生存や発達にも大きなプラスの影響を及ぼすことが、長年のユニセフ活動を通して明らかになっている。

前述したが、女性が人権を持つ存在であると国際的に認められてからまだ日は浅い。それでも、今に至るまで、女性は暴力や理不尽で不平等な扱いにさらされ続けている。しかし、先駆者になる幾万の先輩たちが、時には自らの命を犠牲にしながら戦い勝ち取ってきた蓄積が、徐々に法律や制度の整備に結び付き、現在の女性たちの社会的地位や生活、労働環境をつくっていることを、決しては忘れてはならない。そして、その流れを次世代へ繋いでいく責任を負っていることを私たちは再認識し、女性が人間としての尊厳を本当の意味で保証されるよう、努力を続けていかなくてはならない。もちろん、男性も女性も共に協力しながら。

6．人権意識が希薄の国、育たない国

（1）世界の人権事情：特に開発途上国では？

女性に焦点を当てながら、人権を考えてきたが、この人権は、実に難しい。人権とは「人間が人間らしく生きるために生来持っている権利」（大辞林）で、ヨーロッパで生まれた概念である。1人ひとりは尊い存在であり、いかなる場合でも踏みにじったりしてはならないというという考えは、18世紀末には、アメリカの『独立宣言』やフランスの『人と市民の権利の宣言』に組み込まれていた。しかし、その当時は、「人」には、女性、子ども、植民地の人、奴隷などは含まれていなかった。その後1948年の『世界人権宣言』によって、すべての人が、国籍や人種、性別、宗教、思想信条などによって区別されることなく、同じように人権を持つ存在であることが謳われ、国際的な人権基準となったのである。しかし、世界の三分の一の国などが、これは西欧のキリスト教圏の生み出したものとして認めていない。更に、その後に続く女性、子ども、難民、障がい者等への様々な人権条約の批准をしている国でさえも、理想と現実のとてつもなく大きなギャップを埋め

ることが、なかなかできないでいる。

前述したが、ユニセフにおける活動では、衣食住にも事欠き、或いは明日まで生きることすら保証されない人たち、人間としての最低限の権利からも程遠い人たちが対象になる日々の連続だったといっても過言ではない。戦争や紛争が日常的な環境下での人々、特に子どもたちの身体的、精神的、情緒的な苦痛は計り知れない。たとえ紛争が終結したとしても、平穏な元通りの生活が戻るわけではない。家も家族も仕事も失い、インフラをずたずたに破壊された村や町では、新たな意味での戦争が始まるのである。戦争や紛争によるものだけではなく、政治、経済、社会が不安定な国では、貧困が蔓延している。特に、日々の食事ができなかったり栄養が偏っていたりすることによる病気や慢性的栄養失調の子どもたちには、「生存する」「成長・発達する」という人間にとって最低限の権利も、保証されていないのである。戦下の中で飛び交う砲弾に日々怯えながら、それでもなお学ぶことを喜びとする子ども、先生になる夢を語る12歳の子どもは、「もし大人になれたらね」と付け加える。難民キャンプで生まれ育った子どもやゴミ捨て場しか経験のない子どもは、「将来の夢」を描くことすらできないでいるのである。

(2) 人権問題多発の日本

国家そのものが全体的に政治的、経済的な問題を抱えていて、国民1人ひとりの基本的な生活の保障や福祉、医療、教育などの分野に力を注げないでいる、いわゆる開発途上国などでは、人権などを考える余裕がないのは、致し方がないだろう。しかし、経済的に豊かな国家といわれる日本においても、次々と人権を脅かす問題が多発していることは、折々触れてきた。なかなか表面的にはその存在がわかりづらいが、7人に1人の割合で「（相対的）貧困」に苦しむ子どもがいる。（厚労省2015年）特にひとり親世帯の貧困率は50.8％にも及び、OECD加盟国35か国中ワースト1位という不名

誉な状態である。家庭内においては、ドメスティックバイオレンス（以下DV）や様々なタイプの虐待が、特に弱い立場にある家族の成員に向かって行われている。学校においては、いじめや教師などによる暴力が、職場などでは、パワハラやセクハラなど、やはり権力を持った立場の人たちによる様々な暴力が、引きも切らずに起こっている。2016年の夏、相模原市の障がい者施設で起こった戦後最大と言われる大量殺人事件は、忘れることのできない残酷な出来事の一つだ。元職員だった若い犯人は、障がい者が社会にとって邪魔な存在であると身勝手な動機を語っている。被害者の家族も、障がい者差別や「優性思想が根強い日本」を恐れ、名前なども公表しないという現実を、私たちはどう受け止めるべきなのか。

こうした人権侵害の問題は後を絶たないが、問題は、一般の人たちはもちろんのこと、国の行く末やそのための政策などへの責任を負った国のリーダーたちの人権意識も、非常に希薄であることだ。いじめにしても、虐待をする親にしても、セクハラや強姦などの犯罪にしても、権力や力を持つ強い立場の者が、対象者の人格や尊厳を奪っている卑怯な行為という認識が皆無である。相模原の事件に関しても、本学の学生たちの多くが、被害者に対するempathy（感情を移入し、思いやる・共感する）よりも、犯人の恵まれない職場環境などに思いを寄せ、「彼（犯人）の気持ちも理解できる」といった発言まで飛び出したときは、愕然とした。社会福祉を学ぶ学生たちですらこの感覚なのだから、一般の若者たちはもっと他人の生存権には興味がないのかなと、絶望感で頭が一杯になったものだ。

(3) 人権意識が育たない日本

それにしても、自分たちの身の回りに頻繁に起こっている問題の多くが人権侵害であると思い至る人が少ないのはなぜなのだろうか。人権が侵され、人権が取り上げられ、人権がなくなることがどれほど恐ろしく、自分の生存

にもかかわるほど重大な出来事だなど、私たちは普段考えない。ということは、そもそも人権という概念そのものが、私たちに根付いていないからだろうか。そう考えると、確かにこの概念は、西欧のキリスト教圏で生まれたものであるし、個別の存在、個別の人格といった個の概念が育っていない我が国と西欧諸国とでは、事情が異なるのもうなずける。私たちが今何気なく口にする「自由」であるとか、「主体性」「自主性」なども、西欧社会では、命を懸けて勝ち取ったという歴史を背景に持っている。その結果出来上がった異国生まれの概念や考え方を、単に輸入した日本という違いもあるのかもしれない。

特に宗教的な背景の違いが大きいと指摘する専門家もいる。キリスト教の世界では、人権という概念の土台になる「自己肯定感」は、神との関係から生まれるものであるから、絶対的なものであり、誰も侵すことは不可能である。しかし日本の場合は、例えば神道の教義理念には、自分という存在は肯定されて当然であるとか、だから自分を大切にするべきなどの考えはない。そのため、「すべての人には、生まれながらにして等しく人権がある」といった絶対的な感覚は理解できないのではないか、というものだ。或いは、狭い共同体で農耕などにいそしんできた日本の生活環境も、関係しているのではと考える。狭い島国日本の村や地域などでは、お互いに協力し、他人との関係を築くことに力を注いで助け合って生活してきた。友好的な関係を保つためには、自分がどう思うか・どうしたいかという「自己」よりも、他人に迷惑をかけないためにはどうすればいいのかなどの「道徳」が重要である。個人主義が発達した西欧社会と違い、人権を前面に出すと、わがまま、自己中心的、共同体の絆や和を壊す言動と捉えられることも少なくないのではないか。その他にも、日本人の精神構造の中には、人権という概念が育ちにくい要素は多々あるだろう。与えられた枠組みを疑ったり、枠を壊して自由にはばたいたりする勇気よりも、時代ごとに作られてきた「常識」を、皆がやっている「普通のこと」として受け入れることの方が、心地よいと感じ

ることもその一つだ。多面的な見方を身に付けるような教育、与えられたものではなく、自分の力で考えて行動するといった教育が、欠如しているとまでは言えないが、不十分なことも、人権意識の希薄さの原因を作っているのかもしれない。

実は2年に一度位の割合で、私の講義の受講生を対象に人権に関したアンケートを行っている。2018年の結果を見ると、人権に少しでも興味を示した学生が8割に達した。これは、4年前に比べると少し上昇している。一方、彼らに深く関連する具体的な例、例えば『子供の権利条約』について尋ねてみると、条約を良く知っている・だいたい知っているという学生は36％、『女性の差別撤廃条約』は、46％であった。『子供の権利条約』を知らない学生64％のうち、その名前すら知らない学生が15％もいたのは驚きであった。『女性の差別撤廃条約』に関しても、女性自身がこの国際的な条約を知らない割合は全体の3割もいたのには、愕然とした。人権について学ぶ機会を持った場所は、中学・高校・大学で、ほぼ同じ割合であった。この大学でも、社会福祉の専門家になるのであるから、人権に関しての学びも当然ある。しかし、人権そのものを理解していない上、基本的な知識を持たない、従って、身の回りの諸問題に関連付けて考えられないという事が、予想はしていたものの、残念である。しかも、私の講義は、『国際社会福祉論』にしろ、『ボランティア論』にしろ、授業の内容そのものが、すべて「人権」に関連したものであり、何度も繰り返しそれを強調していた。にもかかわらず、この結果であるから、20年間の私自身の教え方にも大きな問題があったのだと自省すると共に、教師としての自信すら喪失しかけた。

教育現場では、前述したが、人権教育が「道徳」といった特殊な教科の中で教えられることが多いようだ。しかも、人権イコール友達を大切にする、思いやりを持つなどのような、道徳倫理に基づく矮小化されたものに置き換えられてしまいがちだ。人権という概念の本質からは程遠い。更に政府や地方自治体など公的機関が主体になっての人権への取り組み方を見ていると、

相談窓口の開設、人権関連の催し、広報活動の充実など、あれこれやっていますと店先に陳列するだけで満足しているような気がしてならない。取り組み自体が成功しているのか、何を目的に何を達成したいのか、その判断指標は何か、成功したのか否か、もし成功と言えないなら、その原因は何かなどの検証が、ほとんどなされていないのが問題なのである。自分自身の教育方法の不備を棚に上げて偉そうなことを言うようだが、人権教育というものは、教科や分野に関わらず、どの分野でも意識的に組み込まれなければならない、学際的なものではないだろうか。北欧諸国で使用されている子どもたち向けの教科書などを見ると、つくづくそう感じる。きっと教員の側も、科目や教科に関わらず、常に人権を意識しながら現場で教え、子どもたちと共に考え学び続けているのだろうと推測すると、少しうらやましくもなる。

日本人特有の精神構造なども考慮すると、感覚的にはなかなか受け入れられない浸透しにくい難しい概念なのかもしれない。しかし人権意識が希薄な社会、人権侵害に鈍感な国は、たとえ経済的に豊かになったとしても、決して成熟した社会にはなれないのではないかと危惧する今日この頃だ。

7．異文化の中でこそ培われる人間力

では、これからを生きる若い人たちが少しでも成熟した社会を目指していくためには、何ができるのであろうか。

（1） 心の扉を開ける勇気

特にこの2～3年、世界的にもだが、職場や学校、近隣などの身近なところでも、不寛容さが急速に広がってきている。匿名という隠れ蓑をいいことに、インターネットなどでは、悪質な誹謗中傷、底意地の悪いコメントが溢れかえっている。これこそ、人権侵害だということに気が付いている人はどれほどいるのだろう。自分と異質な人々を排除するという心理が、ナチス・

ドイツでのホロコーストを生み出した「民族浄化」思想とつながっていることに思い至らないことがそら恐ろしい。

福祉や人権を重視し、環境や女性の地位向上の面においても世界の優等生と言われてきた北欧諸国でも、移民や難民受け入れ拒否や彼らへのサポートを打ち切る動きに歯止めがかからない。今までも、法律・制度や政策などは難民や移民に驚くほど手厚くても、現実は相当違っていたようだ。多くの国民の心の中はどうやら穏やかではなかった様子が伺える。1990年頃から、難民・移民に対する不満が表面化しており、2010年ごろからは、厳しい規制なども出始めていた。今年9月のスウェーデンでの総選挙結果は、移民や難民の排除などを掲げる極右政党の飛躍的な台頭によって、政治的不安定、先行き不透明な社会を生み出した。冷静で人道的と言われてきた国民でさえも、異文化の侵入に対しては寛容ではいられないことを物語っている。頭では人道的態度が大事と分かっていても、心が許容範囲を超えてしまったという証なのかもしれない。日本でも、80年代には「国際化」ブームがあり、国内在住の外国人や留学生たちとの交流が盛んになったことがある。それから40年近くたった今、国内在住の外国人数は右肩上がりではあるが、果たして異文化に触れることで、彼らに対する理解などが深まったのかは疑問である。本校の留学生が日々遭遇する差別や偏見の数々、彼らへの、時に冷たい仕打ちや言動を見聞きしてきたからなのかもしれない。

多文化共生、異文化理解などと簡単にいうが、現実には難しい。人は、自分と異なった人種、民族、文化や習慣、価値観や考え方、意見を持つ人に出会うと、戸惑ったり避けたり、挙句の果てには、嫌悪したり差別したりしがちだからだ。上述した例でも分かるように、人権意識の発達した西欧諸国でも、寛容性に欠ける言動はみられるし、差別も当然のことながら存在する。

実は、同朋大学でもスウェーデンの学生との交流をした時期があり、2004年と2005年には私のゼミにもそれぞれの年に2人ずつ交換留学生を受け入れた。しかし、ことば、特に英語ができないからという理由で、なかな

か打ち解けない日本の学生たちには、想定はしていたが、正直残念な思いをしたものだ。国際と聞くと、日本人はイコール英語と同列にしがちだ。しかし、英語が流ちょうに話せるからと言って国際的というわけでもないし、言語が苦手でも、うまく異文化に溶け込むことはできるものだ。本学の非常勤講師の村上忠明氏が10年以上も主宰しているアジアの子どもたちのキャンプ（Kids' Asian Union）では、日本を含む北東アジアの子どもたちが、ほんの数日間共同生活や共に行動する間に、言葉が通じなくても、特に遊びを通して意思疎通を上手に行い、楽しそうに交流するという。そしてキャンプの最後には、泣きながら別れを惜しむ程の深い友情を育むことができるのだそうだ。要は、相手を理解しよう、仲よくしたい、何とか気持ちを伝えようなどの、積極的な意思や働きかけが、ことばや国境の壁を容易に超える第一歩なのだと実感する。しかし日本人は、特に大人になるにつれて、自らの心の扉を開けることが苦手のようにみえる。それは、相手との信頼関係が築かれていないことにもよるのだろう。相手の拒絶や冷たい対応などに晒されることへの不安かもしれない。でも勇気をだして相手の懐に飛び込み、「素」の自分を少しだけでもさらけ出すのは、ほんの一瞬の勇気で済むものだ。そのあとに広がる素敵な刺激や解放感は、さわやかな新しい風が体を通り抜けるようだ。視野を広げ、考えを深め、人生が何倍にも楽しくなるチャンスをもたらしてくれる。もちろん時には苦いこともあるだろう。しかしそれさえも、いつか必ず何物にも代えがたい貴重なものになる。

(2) 本質を見極める力、感性を鋭くする努力を

私自身の話をすれば、長い海外生活での様々なプラス・マイナスの経験を通して、知的な刺激もあったし、色々と考えさせられたものだ。喜んだり悲しんだり、時には腹も立てたりしながら人間的にも鍛え上げられたと感じている。マイナス体験を恐れる若者は少なくないが、負の経験は次のプラスへ

の挑戦であり、絶望や憎悪、悔しさは、次へのエネルギーのもとになる。すべての経験が、しっかりと根を張るための大切な栄養素になるし、人生には無駄になるものが無いという実感をもてたことは、大きな収穫であり喜びだ。

ユニセフ専門官として「子どもたちの生命を守り、彼らの生活向上を支援する」と、頭のどこかで優越感に浸っていたバングラデシュでの、少し恥ずかしい話をしよう。前述したエピソードに出てきた市場を縄張りにして働く小さな子どもたちの話には、続きがある。女性がむやみに一人で外出することは非常識と言われたイスラムのこの国で、週末の買い出しは私の楽しみの一つでもあった。ある日私は、骨折をした足にギブスを巻き、松葉杖で市場に車で乗り付けた。いつものように荷物持ちや車の見張りをしてくれた子どもたちに当時で10〜20円位のお駄賃をと財布を取りだした。日本人にとっては安い金額だが、彼らにとってはおそらくその日の唯一の収入になる位大切な額であった。しかし、その日に限って彼らは、頑としてお金を受け取ろうとしない。そして私の不自由な足と松葉杖を笑って指さして、驚く私を残して風のように去っていったのである。

以下のことは、私の推測に過ぎない。豊かな環境に育ち、学問を修める機会を与えられた私たちは、頭を使って物事を考えたり判断したり、行動したりするようになる。しかし学ぶ機会のない彼らは、きっと、自分の胃袋の皮、臓器の皮を通して毎日の空腹の辛さ、痛み、悲しみを感じ取っているのではないか。だから私がどの様な立派な格好をしてお金を持っていても、彼らの目には、それは私という人間の表面としか映っていなかったということだろう。その時の私は「ハンディのあるつらい思いをしている人」に過ぎなかったのではないか。自分たちの空腹時の辛さと同じものを背負っているのだと、人の痛みを理解し、金銭を受け取らなかったのではないだろうかと。そう感じた瞬間の胸苦しさや恥ずかしさ、こみあげてきた涙を、今でも私は鮮明に思い出す。高等教育を受け、長く人生を生き、一般の人から見たら

うらやましい職業に就き、そんな自分に「上から目線の驕り」があったのだと、あの小さな子どもたちを見て深く反省したものだ。これは、開発途上国において出くわすエピソードのほんの一例である。しかしこうした経験の積み重ねは、私に「生きる」ことの意味、物事の本質を見通す感性の大切さを教えてくれたと感謝している。

（3）批判する力・多面的に考える柔軟性

イギリスでの大学生活で学んだことの一つが、英国の学生のクリティカル（批判）精神である。どの講義でも、小クラスの議論でも、教授や講師がいかにうまくデータを示しながら話を進めていっても、学生たちはそれらをうのみにしない傾向が強かった。日本の教育現場の状況に慣れ親しんでいた私は、教える側は、そういった反論や異論をうっとうしいと思うものだと想像していた。しかし教授や講師たちは、学生たちの、時には敵意丸出しのような挑戦を楽しんでいる様子であった。もちろんイギリスの教育制度や内容、理念や目的などは、この国の背景や社会環境も含め、日本のそれとは全く異なったものであることは承知している。日本では、批判と非難を混同して考えがちだ。批判することは、更なる高みを目指す、或いは新たな領域を創造する過程であるといった思いが双方にある。従ってこのクリティカルなものの見方は、学問を追求する上でも、社会を改革する際にも、ひいては自分の生き方を模索する時にも、日常の生活の中ではとても大切である。その視点を持つためには、多面的なものの見方も学ぶ必要がある。

しかし、日本ではこうした成熟した議論が成り立つ土壌がない。同調圧の強い日本社会では、反対意見や異論をオープンに唱える勇気を持ちにくい。反対意見を言われた側も、自分の存在そのものや人格を否定されたような気分に陥りがちだ。要は、非難されたと思い感情的になってしまうのだろう。日本の職場で、「友達だと思っていたのになぜ私に反対するのか」となじら

れ、その後の関係がぎくしゃくした経験もある。彼女を否定した訳では無く、彼女の意見に異論を唱えただけなのに。日本では、クリティカル精神をしっかり学ぶ機会が少ないためかもしれないが、クリティカルな議論が意味や意義を持つためは、多面的に物事を見、時には異論を受け入れたり自分の主張を修正したりする柔軟な対応力と寛容性、自省する謙虚さが求められるものだ。

価値観の違い、習慣の違いなどが特に顕著になる多文化の集合体であった国連組織の中で、自分の思いや感情をうまく相手に伝える難しさは、もちろん数多く経験したものだ。怒りを覚えたことも誤解も多々あったが、根気よくコミュニケーションをとること、できる限り自分をさらけ出し本音をぶつけ合う努力を重ねることで理解が深まり、信頼し尊敬し合える仲間になることも学んだのである。

（4）枠を疑う賢さを！枠を超える勇気を！

私は、「女は、若さが勝負。従って23才頃までには、結婚をして家庭に入るのが当たり前」という時代に育った。まだ、『女性の差別撤廃条約』や『男女平等機会均等法』などができる前、1960年代後半のことである。10代の頃から「女はこうあるべき」といったことに疑問を持っていたこともあり、折りしも盛んであった「学生運動」やイギリスなどで叫ばれだした「女性解放運動」にも共鳴していた。しかし、親を含めた世間一般の圧力とのせめぎあいに耐えられないほど悩んだ末、仕事をして貯めた資金をもとに、悲しむ親との決別をし、イギリスに飛び出した。ところが、日本における世間一般の常識・当たり前に囚われていた私の悩みは、イギリスでは、悩みにもならない受け取り方をされたのである。「あなたの人生よ。世間や親の人生じゃない。何を悩んでいるわけ？！」といった具合に、一蹴されてしまったのである。確かにその通りで、よく考えれば簡単で単純なことだが、人は日

常生活の中で自分の置かれた環境を、客観的にとらえることは案外難しい。常識も今当たり前のことも、時代や場所、その時々の社会環境に応じて変化するものだと、頭では理解していてもである。

偏見と差別を扱った授業で、「人は見た目？」という朝日新聞の資料を利用したことがある。学生たちも主張するように、就活などでも、TVなどでも、顔がかわいい人は得するといった意見は多かった。しかし、この美意識や、体形ですら、時代や国が違えば全く異なるのである。国連時代のアフリカ人同僚に言わせれば、日本の美しいほっそり体形の女優たちは、アグリー（醜い）なのだそうだ。アフリカでは、相撲の関取のように体が大きく胸もお尻もふくよかな人が美人の条件だという。だから小柄な私は、アフリカの同僚たちによくからかわれたものだ。

異文化の中にわざわざ身を置く必要はないが、私は日本という国境をこえたことで、ずいぶん視野が広がった気がする。枠は、何も国境だけではない。自分の中にこそ、育ってきた社会や環境、親や友人、先生たちによって形作られた様々な固定観念がある。この固定観念を枠とすれば、それを絶対視せず、時には疑い、時には打ち破る勇気も、また人間的な成長に必要なことなのではないだろうか。

おわりに代えて　～　好奇心をもち、無限の可能性を求めて！

（1）人間はみな星屑からできている！

はじめにでも述べたが、担当科目であった『国際社会福祉論』などには、私自身の海外での経験や実践を踏まえながら考えた様々な芯となるメッセージが盛り込まれている。それらをいくつかの項目に分けて再構成してみたが、そろそろまとめに入りたいと思う。

20年ほど前から、わたしはなぜか宇宙に関することに無性に興味を持ち

始めた。地球を含めた星の誕生とか、地球外生命体の有無であるとか、いまだ解明がされていないダークマターの存在であるとかである。きっかけは、アメリカの天文学者カール・セーガンの書籍との出会いで「人間は星のカケラからできている」ということを知った時だったか、幼いころから星が好きであった父母の影響が、体のどこかに残っていたからだったのかは定かでない。しかし、人類が皆惑星とほぼ同じ元素から成り立っていると思った瞬間、なぜ、人は国籍であるとか、民族や人種、肌の色、性別、年齢、職業など、様々な「装飾」によって区別し、比較し、優越感や劣等感を抱き、愛憎の感情で、お互いを傷つけあうのだろうといった単純な思いをもったものだ。何十億年の地球の歴史のほんの一瞬の命であるのに、争ったりいがみ合ったり権力の争奪戦に明け暮れることが、芯から愚かしいと思えてくるのである。「人間は宇宙の一部」といったアインシュタインは、「思いやりの輪を広げ、あらゆる生物と美しいままの自然を包み込む」努力が、狭い「視覚的錯覚に囚われた」人間に課せられた仕事だと言っている。あのバングラデシュで出会った子どもたちのように、人々が鎧のように幾重にもまとっている様々な飾りや戦利品には目もくれず、直感的に人間の本質に向き合い、必要なら手を差し伸べることができたら、本当に素晴らしいのにと思ったりする。

（2）「好奇心」よ、いつまでも　～　自分の中の無限の可能性を発掘する！

宇宙に夢中になった頃、高校時代に必死に覚えた、いや無理やり覚えさせられたあの元素周期表に再び出会う。ところが、あの頃無機質で苦痛でもあった表が、カラフルに色分けされ、説明が実にわかりやすく面白い。どのような分野でもそうだが、興味をそそるような実に上手な教え方をする人に出会うと、目からうろこが落ちるように、もやもやした疑問がすっと頭に入

り心に残る。自分自身の教師生活を振り返りながら、反省すること参考になるようなことが次々出てくる。教え方の上手な人が、特にメディアを通して最近目につくようになった。

私たちは、学校で、家庭で、色々なきっかけで、時には圧力などで将来の進路を決定していく。もしあの先生のあの一言がなかったら、もし親の反対がなかったら、あの本や授業に出会っていたら今頃は…などと、周りの人たちなどの影響が、若い人たちの進路や生き方を広めたり狭めたりしていることは少なくない。色々な国の若い人たちに接してきた私には、特に日本の若い人たちは、自分の中にある様々な可能性や能力に気づかないことが多いように見える。そして、もったいないなと感じる事がある。しかし、常に好奇心を持ち、アンテナを張ることで、思いもしなかった可能性を発見することがあるものだ。年齢に関係なく、いつでもどこでも自由に豊かに実り多く生きていくためにも…。

(3) ビバ！回り道・寄り道

「目標持つって何？」「目標持って何かいいことあるの？」等、真面目に聞いてくる学生がここ数年増えた。「いくら努力をしても無駄だ」という冷めた意見もよく口にする。例えば、差別や偏見のトピックスを扱った授業の際も、「（どんなに頑張っても、何をしても）偏見や差別はなくならない。だから無駄」といった具合である。確かに差別も偏見も無い世界など、過去にも現在も、そして未来にも実現はしないだろうな、と思う自分もいる。でも、そういった時には、私の中の「人生の先輩として、少し格好をつけたい」気持ちが頭を持ち上げるのだ。そして、「A drop in the Ocean~大海の一滴」という言葉を学生たちに話す。マザーテレサも口にしたというこの言葉が私は好きだ。すごく小さなことを表すことばだが、テレサは言う。「私たちのしていることは、大海のたった一滴にすぎない…少しずつでもやり続

ければ大きな海になる…でもやめれば、一滴分海は小さくなる」と。彼女にとって大海は、小さな思いやりや親切、善意が集まってできた「愛の海」なのだろう。無駄なことは無い、少しずつでもあきらめずに続けようという強いメッセージだ。

さて、先進国の中で、日本ほど一本のレールに乗せ人を追い立てる国は無いのではないか。教育にしてもしかり、就職にしてもしかりである。一つの起点から、もう一つの起点に向かって新幹線でなるべく早く到達するように効率よく動き、世の中の制度も価値観も効率・効果を求めて成り立ち、それを頼り信じる人々も躍起になる。各駅停車の鈍行列車に乗り、途中下車をしてぶらぶら散策するなどは、「変わった人」で、正道から外れた、ずれた感覚の持ち主であると見られがちだ。しかし、名もない駅にふらりと降り立ち寄り道をすると、色々なものに遭遇する。小川のせせらぎ、道端に川べりに畑に群れ遊ぶ数々の小さな命、何気なく咲いている道端の草花、頬を撫でる風のそよぎ、揺れ動く木々の間での小鳥たちのさえずりなど、新幹線に乗っていたら決して味わえない、豊かな出会いである。

海外には、若いうちに実に様々な経験を積む者が多い。いわゆるギャップイヤーという制度が大学生に奨励され、ボランティアや留学、インターンなどを取り入れている程だ。日本でも、一時東大などで話題になったことがある。が、様々な制度や考え方に柔軟性の足りない日本の中では、あまり定着しそうにもない。が、今後は歓迎する・しないに関わらず、国境の壁はますます低くなるだろうし、狭い日本の枠にとらわれてばかりいては、生き残っていくのは難しいだろう。与えられた一直線をただ受け身で走り続けていては、豊かな経験も出会いも、柔軟に物事に対応する力もつきにくい。人が敷いたレールをひたすら走るのもいいだろう。自分の好きなことを、できるだけ思う存分できればと願うばかりだ。私はといえば、回り道に大いに賛成である。大変なことも多い。もちろん、人と比べたりして焦ったことも若い頃にはあった。しかし結果的には、自分の道は自分で作る方が、人生は面白い

し楽しいし、深くなる。寄り道・回り道、万歳だ！

（4）行動する勇気をもって！

最後はやはり私事の登場である。敗戦まもない戦後の混乱期に、愚かな戦争で無駄死を余儀なくされた同胞たちを思い、生きていく指針を失い絶望の中で苦しんだ父の話である。海軍の軍医であった彼は、生きることに対してあまり要領の良い人ではなかったようだ。しばらく復員船での支援のため太平洋を往来した父が、この海のような広い心を持った人間になるようにと私につけた名前が、洋子である。その私は、長じて父が放浪した海を渡り、世界の様々な国で多様な環境、その中で一生懸命に生きるひとたちと出会うことになるのだが、皮肉なことに、父は私の日本脱出に真っ向から反対した。まだ家父長制の名残があった時代に育った人だったから、女性が海外へ飛び出すことには抵抗があったのだろう。その後ほどなく父は他界する。亡くなる直前に彼は、「野垂れ死にしても、（親に）助けを求めないであろう」頑固な娘へのメッセージを、クリスマスプレゼントと共に母にひそかに託した。それを父の死後手にした時、はじめて親の愛情の深さを実感して、心から自分を悔いた。父という反発するべき壁を突然失い、一時は生きる目的を失いかけた私だが、「国辱になるような生き方はするな」という、明治の父親が口にするような古めかしい言葉を、面白おかしく思い出しながら、その後長い海外生活をすることになる。訪れた国は、50か国以上にはなるだろうか。主には、国連の仕事の関係ではあるが、イギリス留学時に知り合った友人などを訪ねての個人の旅行という楽しい滞在経験もある。

様々なしがらみを振り切って、居心地の良い家庭や家族、友人などのいる環境を飛び出すことは、本当に難しいことであろう。しかし、短期間でもいいし、それが観光旅行のようなものでも構わない。特に若い人たちには、激動するアジアを見てほしいと願わずにはいられない。大げさかもしれない

が、人生への向き合い方、人生観、世界観がとてつもなく変化することは間違いないし、視野も広がる。これからを生きる若い人たちには、常に好奇心を忘れずに、自分の可能性を自ら狭めることの無いように、そして、一歩踏み込んで行動する勇気を持ち続けてほしいと願ってやまない。

謝辞

私が担当した『国際社会福祉』の分野を切り開かれた、今は亡き西沢信正先生には、公私ともに本当にお世話になった。世界的には、この学問領域は先進国を中心に根付いているし、1996年のG８リヨンサミットでは、日本政府は「世界福祉構想」をアジェンダとして提出している。しかし現実には、2018年の現在に至るまで、地球規模的に社会を総合的に見据えるという視点は、残念ながら日本の社会福祉の世界にはあまり育っていないようである。西沢先生の先見の明を引き継ぎながら、更なる発展に寄与することができなかった私自身の非力を、この紙面をお借りして謝りたい。

大学という新しい職場で、大学特有のシステムなどにとまどう“帰国子女”のような私を、温かい目で見守りご支援・ご指導下さった同僚の先生方、事務の職員の方々にも、感謝の意を表したい。「国際・社会貢献コース」設置後、その主要科目を担当し多くの協力やアドバイスをいただいた本学非常勤講師の村上忠明先生、20年前の着任以来、様々な励ましやご指導を頂いた名誉教授の玉井威先生には、特にお礼を申し上げたいと思う。

最後に、私に刺激を与え続け、学びの幅を広げる機会をくれた何千人もの学生・卒業生たちに、心からありがとうと言いたい。今の私があるのは、彼らの存在のおかげであると思っている。日本や世界の様々な福祉現場での彼らの今後の活躍を、心から祈願する。

（本学特任教授：国際社会福祉論）